

《2014年 12月 証し》

二つの話

関 雅人

わたしの故郷島根県に隣接する山口県萩市に史跡松下村塾があります。

松下村塾のリーダーであった吉田松陰は、明治維新と維新後の政財界に大きな影響を与えた人々を育てました。徳川幕府が鎖国政策をとっていた1854年、松陰は下田沖に停泊中のアメリカ軍艦に小舟で乗り付け、司令長官ペリーにアメリカへの渡航を願うのですが許されず、自首します。はじめ、江戸・伝馬町の牢に入れられ、五ヶ月後、長州萩の野山獄に移されます。野山清右衛門という武士の住まいを改修して12の個室を設けたこの獄には、11人の囚人が収容されていました。比較的自由が許されていたようで、囚人間の交流もでき、また差し入れなども自由であったといわれます。彼は、ここで高須久子に出会います。

高須久子は、萩藩の石高330石取りの家の一人娘として育つのですが、婿養子にむかえた夫が若くして死んでしまいました。ひとり身となってしまった久子は、三味線をつま弾いたり京唄などのはやり歌をうたうことでさみしさを紛らわしていました。やがて三味線弾きの弥八と勇吉を虜虜するようになるのですが、問題はそこからです。この二人は被差別部落出身の青年でした。二人に食事や酒をふるまつたりして手厚くもてなすさまをみた久子の親戚の者たちは、藩に訴え出ます。結果、被差別部落の人たちを平民同様に扱ったという咎で、久子は野山獄に入れられてしまいます。

松陰はこの時25歳、久子は37歳。歌の手ほどきを受けたり読書会をもったりして、互いに惹かれあう入牢生活であったようです。

武士の家の者が被差別部落の人たちと親しく付き合っている。これはおおごとだと考えた親戚たちが、お畏れながらと藩に訴えでた結果、そうか、それはけしからんことだと牢獄に入れてしまう……。ひどい話ではありませんか。

江戸時代のことだから、ということですまされるでしょうか。今はそんなことはない、と言い切れるでしょうか。わたしたちはそんなことはしないと言えるでしょうか。たしかに、あからさまに差別はしていないと思います。しかし、ひそかに心のうちで、付き合うことを拒否しているのではないか、それだけ陰湿に差別をしているのではないか。結婚差別が今なおある。就職に際して差別は絶対にないと言い切れますか。現在もいろいろな形で、差別し、あるいは差別を見逃しているのです。江戸時代のことではなく、今の問題ではないか、そのように思います。

たとえ一般社会はそうであっても、教会は違う。信仰をもっているわたしたちは、他の人をみくだしたり差別したりすることはない……、そういう声が聞こえます。しかし、はたしてそうでしょうか。わたしたちは、そんなに立派なものでしょうか。わたし達の心の中に、自分たちは選ばれた優れたものというおごりたかぶりがありはすまいか。さまざまな理由で少数者にされている人たち、弱者にされている人たちを、自分たちは恵まれた立場にあるということを楯にして、差別しているのではないか。そう、口では自分が弱く小さいもの、と言いながら、本当のところは自分の力や存在を誇っている……。そういう欺瞞の中に生きているのではないか。

利休の「木守り」

過日、「部落問題に取り組むキリスト教連帯会議（部キ連と略称しています）」の研修が、堺

市の舳松人権歴史館でありました。将棋の阪田三吉が育った場所であり、研修会場の近くには千利休の旧居もありました。茶所と言われる松江で育ったものですから、本来の研修とは別に、興味深い場所がありました。

先日、用事があって久しぶりに帰省してきました。紅葉はまつ盛り、あちこちの家の軒下に、柿がつるしてありました。付近の家の庭の渋柿の木に、採り残した実が幾つかありました。

昔の人たちは、秋になって柿などを収穫するとき、全部採ってしまうのではなく、一つ二つ実を残したといいます。採りにくい高みにある実だから、というのではありません。自然に対する感謝でしょうか。鳥の餌として残すやさしさでしょうか。来年もよく実がなりますようにとの祈願からでしょうか。その土俗信仰か風俗あるいは残された実のことを「木守り」と言います。

千利休が愛用した茶碗に「木守り」という銘を付けた茶碗があります。名の由来はこうです。あるとき門弟たちを集めた利休はありつけの茶碗を並べて、好きなものを持ち帰るように、といいました。利休のことですから、たくさんの茶碗それもいわゆる名品を多く所有していたことでしょう。門弟たちは、それぞれが名品と思われるものをありがたく頂戴して帰っていました。そこにだれも選ばなかった茶碗が、一つだけ残されました。利休はその茶碗を「木守り」と名付けて愛用したということです。

高須久子の話、利休の「木守り」の逸話は、関係のない話ではあります。

この二つの関係のない話から、一つのメッセージをききとっていただきたいと願っています。それは、皆が無視てしまっている、あるいは関係を断っている、距離を開けている、小さくされている存在を、わたしたちがどう大切にしているか、ということです。私自身を含めてです。

キリストは、小さく弱いわたしを大切に迎え入れてくださった、今も、これからも、そのように扱ってください。それがわたしの信仰です。そうであるのに、自分がさもたつとい者であるかのように考えて、他の誰かを低くし卑しめているのではないか。そのような傲慢を抱いて生きているのではないか、ということを考えます。そのような思いが錯綜するなかでどう生きるのかという課題が、各人に突き付けられているのではないか、というメッセージです。